

はじめに

私たちは、あの時はつらい経験だったが今思えば良い経験だったと振り返り、先行きの見えぬ将来に慄いては今の生活を見つめ直す。経験や生活あるいは人生という言葉で自分や他者の諸体験のまとまりを名付け、それらに意味(Sinn)ないし意義(Bedeutung)を与える¹。

なるほど、体験と意味ないし意義との結びつきについて心理学や社会学その他多くの学問が関心を向け続けてきたのは明らかだ。むしろそれゆえにこそ疑問に思えるのは、体験に意味ないし意義を与えるというこの事柄がなぜこれほど多くの領域を跨いで行われうるのかということである。しかし、この問題について社会や科学の領域での概念史を網羅的に考察することは本発表者の手に余る。そこで本論はディルタイによる精神科学の基礎づけを手掛かりにしてこの問題への足掛かりを得たい。なぜなら、彼は体験に対して意義お

¹ 本論が以下で論じる人生全体の意味は、いわゆる生きる意味ないし生きがいをも含むがそれに留まるものではない。両者の違いをあらかじめ二点述べておく。

第一に本論が対象としているのは人生が意味というカテゴリーによって肯定的にも否定的にも語られるという事象である。傷ついた人々のセラピーにおいて人生の意味の探求が生きる意味ないし生きがいとして重視されているのは当然であろう (Frank(1995)、Frankl(2010))。その一方で、様々な体験は肯定的だけでなく否定的にも意義づけられ、その意義によって照らされる人生全体も同様に肯定的または否定的に意味を与えられうるのも確かである。ところが奇妙なことに、哲学者による人生の意味論の多くもまた人生の意味を生きる意味や生きがいとして理解しており、人生の否定的な意味を取り扱ってはいない (Metz(2013)所収の哲学者たちの諸論文、佐藤(2012))。それに対し、山口(2018)はとりわけメッツの議論が無自覚に信奉する近代的価値観に基づく人生の意味論であると批判している。そして彼は「ポストモダン」的な人生の意味論を求めるために歴史物語と人生の意味の関連に注目し、歴史物語から自分や他人の生の意味を汲み取ることが人生の意味への人間の向き合い方のひとつであると主張していく。ただし、この議論では結局のところ人生の意味と生きる意味を同一視しており、さらにいえば、人生はむしろ有意味でも無意味でもないのではないかというポストモダンの問いかけは登場しない。ただ、本論はそうしたポストモダンの問いには向かわず、人生が意味づけられうるということを前提に進めていく。

第二に、人生の意味はこれから生きる意味だけでなく、いわば生きた意味としても語られうる。ある個人の人生の意味はより普遍的な歴史叙述においても用いられ、例えば歴史的人物が社会に与えた影響をもとにしてその人物の人生の意味が評定される。この評定を行うのは当人である場合もあれば他者である場合もあり、そしてその他者は自らにとってのこれから生きる意味を歴史的人物から抽出するためにこの評価が行っているとは限らない。

以上のことから本論の問題の出発点とは、様々な領域で、肯定的否定的ないみでの生きる意味にも生きた意味にも当てはめられるこの意味カテゴリーとは如何なるものかということなのである。

よび意味カテゴリーを精神諸科学が用いることの認識論的根拠を論じているため、彼の議論は我々が様々な領域で体験に意味や意義あるいはそれに類するカテゴリーを当てはめている事情の一端を明らかにするからである。

本論では以下の順序で三点を明らかにする。(1) 意味と意義を精神科学に特有なカテゴリーであるとディルタイが考える第一の背景について。彼は認識論的論理学の中で精神科学に可能なカテゴリーの根拠を問い、意味と意義カテゴリーをその例として挙げる。その後、彼はフッサール『論理学研究』(1900)における体験の静態的分析に注目していくのだが、その後は体験の動態性に適したカテゴリーの整理に向かっていく。そうした中で体験の意味と意義の関係は体験連関の全体と部分の関係として規定され、両者は一対で精神科学の中心的なカテゴリーとなる。(2) 第二の背景は、歴史哲学への批判にある。特定の目的へ向かう人類の進歩という歴史哲学が抱く想定への批判において、ディルタイは意味と意義を歴史の全体と部分へと当てはめる。というのも、個人にとって体験の連関は人生経過とともに揺れ動くのと同様に、諸個人の相互作用から成立する歴史社会の連関もまた歴史経過とともに揺れ動くと彼は考えるからである。したがって、意味と意義の役割とは、歴史の終極的目的を想定せずにこの揺れ動く歴史的諸事象を規定することにある。(3) このように個人と歴史社会の理解のために意味と意義カテゴリーが有用である理由は、意味と意義の循環する規定性と全体の非閉鎖性にある。変転する個人の人生と歴史の全体はその動きのさなかに掴まれねばならない。そして意味と意義は規定しあい、かつ、体験全体は常に変化するため、意味と意義は人生と歴史全体に寄り添って変わり続けることができる。本論は最後にこれまでのいくつかの人生の意味論を参照し、この意味と意義の循環規定性と全体の非閉鎖性が我々の体験理解を実際に条件づけていることを確認する。

1. 生のカテゴリーとしての意味と意義

まず、意義と意味という二つのカテゴリーを含むディルタイのカテゴリー論の枠組みを確認しよう。彼のカテゴリー論とは、あらゆる内容を捨象した形式論理学の一部に留まらず思考の対象ごとに当て嵌められるべき諸カテゴリーを区別する権利と適用範囲を定めるものである。とりわけディルタイの関心は、精神科学が取り扱う対象に適用されるべきカテゴリーを自然科学のカテゴリーから区別し、前者の権利根拠を明らかにすることにある。

「生と認識——認識論的論理学およびカテゴリー論への計画」(1892 - 3 年)においてディルタイはアリストテレスとカントのカテゴリー論を批判しながら自らのカテゴリー論の構想を立ち上げる。アリストテレスは存在者を述語づける最高類概念として、量、質、時間や場所など約十個のカテゴリーを区別し、カントは判断表をもとに質・量・関係・様相それぞれに三個のカテゴリーを配して合計十二個のカテゴリーを秩序づけた。それらに対してディルタイのカテゴリー論の出発点とは、「カテゴリーの連関は知性の統一的な本質に基づいている」(XIX,361)というアリストテレスとカントが持っていた前提への批判にある。ディルタイによると、そもそも生は知情意の連関の中で形成されるものであり、それゆえに生を把握するカテゴリーの数を知性が確定したりその内実を一義的に体系的に取り扱ったりすることはできない。この生の連関を把握するためには、知性の統一ではなく「生の連関そのものに基づいて」(Ibid.)生き生きとしたその連関を捉えるカテゴリーが必要なのである。

そこでディルタイはそうしたカテゴリーの可能性を明らかにするため、まずはカテゴリーを「形式的カテゴリー(formale Kategorie)」と「実在的カテゴリー(reale Kategorie)」に大別する(Ibid.)。形式的カテゴリーとはアリストテレスやカントの前提していたような知性的なカテゴリーに該当し、その例として「同一」や「区別」といったカテゴリーが挙げられる。これらのカテゴリーは形式的であるため知性によって一義的に規定され、その全貌が見渡されうる(Ibid.)。しかし、形式的カテゴリーは、内容を捨象した形式である限り、ありありとした体験の内実、体験の実在性を扱うことができない。そこでディルタイが生に連関に基づいて生の連関を捉えるものとしてカテゴリーとするのが実在的カテゴリーである。「実在的カテゴリーの特徴とは、思考によってはその内容が極めがたいということ(Unergründlichkeit)である。実在的諸カテゴリーは生の連関である。生の連関は覚知にとって確実であり意識されている。しかし、知性にとって生は極めがたいのである」(Ibid.)。この実在的カテゴリーは知性(思考)ではなく生の連関に基づいているため知性(思考)によって一義的に規定されたりその数を特定されたりできないが、この実在的カテゴリーこそが体験(生)をふさわしい仕方で把握するための認識論的な基礎を与えるのである。

こうした議論の枠組みの中、意義と意味という二つの実在的カテゴリーが注目されていくことになる。先の論考の後、「続編草稿」(1911年)(以下、「続編草稿」と略記)の中でディルタイはこの実在的カテゴリーを「生のカテゴリー(Kategorie des Lebens)」(VII,228)と呼び、意義カテゴリーと意味カテゴリーに具体的な規定を与える。一方の意義カテゴリー

一は全体に対するその分枝ないし部分がもつものとして捉えられる。「分枝(Glied)は全体に対して意義を持つ」(VII,262)のであり、意義は「部分が全体を実現する(realisieren)」関係とされる(Ibid.vgl.VII,233f.)²。それに対して意味カテゴリーは意義によって実現されるべき全体を示すものとされる(VII,236,287) vgl.VII,74)。それでは、以上のように規定される意義カテゴリー及び意味カテゴリーは実際にどのように体験の叙述に際して体験に適用されるのか。この点に向かう前に、ディルタイがそもそも体験をどのようなものとして捉えていたのかについて確認しよう。

2. 体験の基づけ構造

「諸研究」(1905)のなかでディルタイは、夜半にまんじりともせず原稿を見つめながら自らの研究が完成するのかと憂いている場面を取り上げて体験の構造を次のように分析していく。

「私は対象に注意することによって、その感情状態の中にある構造的関係を区別する意識へともたらず。……私の原稿についての表象が私の体験の把握の基礎であり、私はこの表象を注意深く分解する。私はこの対象的なものについての感情から、その基礎となる疲労の感情を分離し、そしてまた原稿の完成についてのその疲労の感情に基づく心配の感情を分離する。……そしてまさにこの体験の統一の構造的本性によって、

ディルタイ全集 *Dilthey Gesammelte Schriften* からの引用は巻数をローマ数字で、頁数を算用数字で表し、()に入れて本文中に示す。またフッサール全集 (*Husserliana*) からのものは *Hua.* と略記したうえで、巻数をローマ数字、ページ番号を算用数字で表し、()に入れて本文中に示す。

² なお、ディルタイは、意義カテゴリーがとくに過去の生を指すカテゴリーであるという別の規定を加えており、未来を示す目的カテゴリーおよび現在を示す価値カテゴリーと比べて、意義カテゴリーが「歴史的思考のもっとも固有なカテゴリー」(VII,202)であると論じていく。ここでは、過去だけが生の連関を保持しており、現在と未来はその連関から切り離されている。しかし、現在や未来から切り離されてそれ自体としての過去というようなものが果たして語られうるのだろうか。実際のところ、ディルタイのカテゴリー論についての諸テキストを通して検証すると、過去と現在と未来の整理はディルタイの意義・意味カテゴリー論の終着点となる発想ではないことがわかる(VII,233)。過去はなるほど将来の目的のための土台であるが、同時に、我々がそうした目的が過去を振り返らせる(Owensby(1994) p.101)。本論では現在(価値)、過去(意義)、未来(目的)というディルタイの整理の妥当性についての議論はこれ以上進めず、この点については別稿に委ねる。

把握はさらに遡って過去におかれた構造に結合される諸体験に進むことを要求する」
(VII,28)。

七二歳のディルタイがその歳で始めた研究を完成できるかと夜半に憂いている情景はたしかに感傷的ではあるが、しかし彼はこの体験のもつ構造を冷静に分析していこうとする。この体験の中では、原稿の表象の把握（「対象的把握(gegenständliches Auffassen)」）を基にして苦悩などの感情が結びつき、さらにはそれらに規則的に繋がる過去の体験も織り込まれたものとして「構造的意識連関(struktureller Bewußtseinszusammenhang)」が形成されていく(VII,28)³。「作用(Akt)と内容」の間の関係は体験可能な態度の「規則性」を持つ関係であり、「体験」とはそうした心的性の構造を形成する「単位(統一体 Einheit)」なのである(VII,21. Vgl.VI,314.)。

ここで注目すべきは、ディルタイがこのように志向的關係として性格づけられた体験によって心的生の構造を取り扱い、さらに、その構造の分析を体験が実際に形成される過程ではなく体験における諸志向性の階層、すなわち「発生的」関係(VII,35,44,49)ではなく「基づけ(Fundierung)」(VII,10,67)「基づけ関係(Fundierungsverhältnis)」(VII,35)によって行おうとしている点である。そもそも、アカデミー発表に用いられたこの「諸研究」(1905)という論考は、ディルタイが以前に発表し多方面から否定的に受け止められた『記述分析心理学の理念』(1894)の考察の正しさを改めて強調するべくまとめられたものであり、その際、当時大きな注目を浴びたフッサールの『論理学研究』(1900)と自らの『記述分析心理学の理念』の類似性を確認しながら行われた論考である。ディルタイはこの基づけ関係についてフッサールからの参照箇所を明記していないものの、例えば「意にかなうもの(das Gefällige)」なしには「適意(Gefallen)」は成立しえないという関係、すなわち「基づける表象と基づけられる作用の関係」(Hua. XIX/1, 390)を念頭にしていることは明らかである。実際、この論考でディルタイは表象把握を「対象的把握」と呼ぶ一方で、感情及び意志を「対象的把持 gegenständliches Haben」(VII,45)と呼ぶのはフッサールの次のような用語にも対応している。「それら(適意や欲求など)はすべてそれぞれの思考的關係を、それら

³ この「把握(Auffassen)」という用語についてディルタイはこの論考では出処を述べていないが、フッサールから引かれたものだろう(Hua.XIX/1, 416)。その一方、一九〇六年の別の草稿では、この把握という用語はフッサールの「志向(Intention)」の言い代えであるとも述べている(XXIV, 95)。いずれにせよ、この時期のディルタイはフッサールの用語に注意しつつ心的生の構造論を進めていることは確かである。ディルタイによる志向的体験の構造分析については、上島(2011)も参照。

の基礎にある表象に負っている。しかし負っているというこの言葉の意味にはいみじくも、
<それらが他のものに負っているものを、それ自身もまたみずから所有している(haben)
>ということが含まれている」(Hua. XIX/1, 390) (補足は引用者、強調は原著)。

なるほど、以上の用語をディルタイがフッサールから引き入れてはいるが、それ以前からディルタイは心的生の構造を意識の志向性によって解明しようとしていたことも確かである。たとえば一八七八年の心理学講義で彼は次のように述べている。「意志が何かを意志する場合、それは表象内容として意識する者にとって考えられうるからである。したがって、意志することにとっては常に意識があり、意識された表象なき意志というのはそれ自体が自己矛盾である」(XXI,128)。ここから、表象内容とそれへと向かう意志というこの関係を志向的關係として読み解くことは十分可能だろう。また、「諸研究」以前のその他の講義録や草稿の中でもディルタイは知情意の基づけ関係に類似した次のような説明を繰り返している。「意識内容には感情の色合いがあるが、すべての知覚に感情の色合いがあるという命題は証明できない」(XXI,112. Vgl.XXI,207,244,272)。そしてさらに、「表象—感情—意欲の秩序において、だから感情なき欲求などは考えることができない。……それぞれのクラスにおいては、先行するクラスから独立した要素がつけ加わる。……新たな要素はこの基礎から独立したものとして捉えられねばならない」(XVIII,73)。

以上の事実からみて、フッサールによる意識の志向性や基づけ関係の考察にディルタイが同意し、フッサールの『論理学研究』での用語を参照・利用することで自らの『記述分析心理学』に対する周囲からのかつての否定的評価を払拭できると彼が期待したということについては十分推測できる。ディルタイとフッサールの考察が実際には必ずしも一致していないとしても、ではあるが。実際のところ、ディルタイによるフッサール理解にはずれがある。例えば、ディルタイは感情と意志との関係をも基づけ関係として語っているが、フッサールは両者が基づけ関係にあると明確に語ってはいない。フッサールが述べているのは、「判断は喜びに対する基づけの作用」であるが、「判断は、憶測、懐疑、質問、願望、意志作用などを基づけることもあり、あるいは逆に、後者の各作用が基づけることもありうる」(Hua.XIX/1, 405)という点に留まる。つまり、感情と意志の基づけ関係を論じているのではない。フッサールの見るところでは、そうした高次の複雑な諸作用の間での基づけ関係は「記述的心理学的な究明すら今のところまだほとんど何一つ着手されていないありさま(Ibid.)」なのである。さらにいえば、フッサールが認めるのはあくまで感情や欲求という「非独立的な志向的因子」が表象作用に基づけられねばならないということまで

であり(Hua.XIX/1, 428)、ディルタイのように表象、感情、欲求が互いに独立であるとは考えていないのである⁴。

3. 作用連関のなかでの体験の意義

さて、志向性と基づけ関係によって体験とその連関を分析していったディルタイは我々が意義や意味を体験にあてはめる場面をどのように考察したのだろうか。続く「続編草稿」(1911)のなかでディルタイは体験に意義を当てはめる場面を次のように説明している。「我々が未来のために目的として立てたものが過ぎ去ったことの意義規定を条件づける」(VII,233)。また、「意義が生じるということが想起する人間にとって明瞭であるのは、将来体験しうることと関連させてである」(VII,237)。つまり、或る体験に我々が或る意義を与えることができるのは、過去や現在の或る体験がその体験にとって未来の体験と関連付けられるときである。とはいえ、実際にはどんな体験でも他の体験と関連付けられると意義を得るというわけではないだろう。この点についてボルノーは次のように指摘している⁵。

「基本的に顧みる眼差しの中のみ登場するものとして意義を理解する根拠は、この意義そのものが何かすでに体験そのものの中に横たわる観念的なものとして見られ、この観念性によって体験を引き立てさせているということにあるのではなく、体験がくそれを含むより広い生の中で作用したことによってのみ、或る意義がそれに付け加えられる、ということにあるのである。ある体験が意義を持つのは、それが後の生を規定する限りにおいてである。……意義の連関の定義は……作用連関(Wirkungszusammenhang)と結びつく。そして意義と作用の結合とは、私が作用によって初めて意義を認識するということである」⁶。このように、それ自体で意義を有する体験などは存在せず、あくまで作用連関によって或る体験に意義は当てはめられる⁷。

⁴ さらに、自らの記述分析心理学をフッサールの議論を参照しながら確認するというこうしたディルタイの意図のうらで、ディルタイは体験の対象、内容、充実に関するフッサールの『論理学研究』における認識論の枠組みを素通りしていく。この点については別稿を予定する。

⁵ ただし、ボルノーはここからさらに、過去、現在、未来のそれぞれの時間区分に対して意義、価値、目的のカテゴリーをそれぞれ配置するというディルタイの議論をもそのまま受け入れてしまっている。注1でもしてきた通り、この点について我々は注意しなければならない。

⁶ Bollnow(1980) (翻訳 239 頁以下) 参照。

⁷ ディルタイはこうした作用連関の中での意義カテゴリーの適用を主張する一方、その都度の体験については主観的感情を基にして「価値 Wert」カテゴリーによって評価できると考えて

ところでここで触れられている「作用連関」とは、自然因果連関とは異なり「内在的目的論的性格」をもつものとしてディルタイが語った連関をさしている(VII,153)。諸個人は歴史的社会的世界との間で影響を与えあうという「相互作用」のなかで価値を生み出し目的を実現する(Ibid.)⁸。ディルタイによれば、そうしたことが可能なのは相互作用が本来的に個人に発するものだからである。すなわち、個人の心的過程の部分がその個人の全体へと規則的に結びついて心的生の全体を構成するものは作用連関であるのだが(XXIV,159)、歴史的社会的世界がそうした諸個人から働きかけられ積み重ねられたものである限り、歴史的社会的社会と個人もそれぞれが全体と部分となって作用連関を形成しているのである(VII,Vgl.VII,152,257f.)。しかし、この作用連関の性格について作用連関と自然因果との区別や前者の適用範囲についての議論の詳細についてはここではこれ以上立ち入れない。本論は意義・意味カテゴリーとの関連での作用連関に論点を絞って論じてみたい⁹。

まず、或る個人の体験とそれに関わる作用連関（歴史的社会的世界及びその個人の人生全体）との関係とは部分と全体の関係である。そして、或る個別体験に当てはめられる意義カテゴリーに対応してその体験を含んだ体験連関の全体に当て嵌められるカテゴリーが意味カテゴリーである。こうした意義（部分）と意味（全体）という対応関係についてディルタイは『構成』および「続編草稿」の中で繰り返し触れているのだが(cf.VII,74,138,152,199,227,236,287)、どのように意義と意味が或る体験に当てはめられるのかについてのディルタイの説明は非常に少ない。そうした中でも本論が注目したいのは

いる。「いかなる生もその固有な意味を持つ。生は或る意義連関に存しており、そのもとではどの想起された現在も固有の価値を持つが、想起の連関において全体の或る意味への関係をも持っている」(VII,199)。生の連関の中での意義とその都度の現在との対比は、例えばルターの人生を語る際にも触れられる。「ルターの人生は新たな宗教性の把握と遂行の中ですべての具体的な諸過程の連関として意義を持っている。このことがそれ以前とそれ以降の具体的な状況の包括的連関のなかでのエポックを形成しているのである。歴史的に見た時の意義とはここにあるのだ。しかし、人はこうした意義はルターの人生の好ましい諸価値のなかにそうした意義を探すこともできる。そうした場合、意義は諸関係の中での主観的感情の中にあるのだ」(VII,237)。この個所では意義という用語が二義的に用いられる曖昧さはあるものの、ディルタイがとくに意義を連関の部分を表すカテゴリーとみていた点は確認出来よう。

⁸ 相互作用については上島(2012)を参照。

⁹ マックリールは、ディルタイによって1911年以降に多用された作用連関という用語は特別な原因的因果性を導入するべく意図されたものであるというより、むしろ意味の枠組みで作用を捉えなおすことで「原因そのものの重要性を減らす」べく意図されたものであると分析している(マックリール(1987) p.316ff.邦訳 354 ページ以降)。オウエンズビーもマックリールの分析に賛成し、彼も作用連関を目的、力関係そして自然因果を含む連関であると理解している

(Owensby(1994), p.122)。こうした非因果的説明の仕方を確認する視点を本論は全体と部分の関係を通して提供するだろう。

次のように意義と意味についてのディルタイの説明である。

「理解に共通しているのは、規定的でない仕方で規定されている (unbestimmt-bestimmt)部分の把握から全体の意味を把握していこうとする試みが、その逆に、この意味から部分を詳細に規定しようとする試みと一緒に進んでいくということである」(VII,227. Vgl.VII,152)。

意義と意味の追求は両者を循環的に規定しあいながら進む。しかし、そこには常に二重のいみで未規定性が付きまとうだろう。第一に、ある部分の意義を求めようとする関心はその探求作業を始める段階ですでにその意義についての何らかの予感のようなものに突き動かされているはずである。つまり、その意義がのちに規定されるだろうが未だ規定されていないという仕方で我々は或る体験に注目し、その体験の意義を求めはじめる。他方、ある部分の意義を全体の意味に照らして規定できたとしても、生が変化していく限り、その意義の規定は確定されない。その生が続く限り、すでに与えられた意義の規定はもはや規定ではなくなる可能性を保ち続ける。我々にとって部分の持つ意義の探求はその始まりにおいても途中においても確定的に規定できない。

ところで、ここからディルタイはさらに一歩進み、人生の意味と意義の見積もりが取れる地点に言及する。「このこと(=意味と意義の関係)は、決して完遂されない関係なのだ。人生の最後の瞬間になって初めて人生の意義についての見積もりが取れる。したがってこれは本来人生の終わりに瞬間的に生じるか、その人の人生を迫体験する人においてなされるに過ぎない」(VII,237)(引用内括弧は引用者の補足)¹⁰。なるほどディルタイのいうように、もしも人生が終結して人生全体のもつ意味が確定されているとしたら意義と意味の循環的な規定作業は起こらないようにも思われるかもしれない。また、視点を変えてみれば、前もって何らかのイデオロギーによって人生全体の終わりが規定されているならば、同じく循環的な規定作業は起こらないかもしれない。しかし、或る故人にまつわる出来事の意義とその個人の人生全体の意味を我々が評価しようとしても、そうした評価は常に私の人生の途上で行われる限り迫体験する私に連動して変化するのではないだろうか。私がイデ

¹⁰ 作者が自らを理解した以上に解釈者が作者を理解するという解釈学の「最終目的」(V,331)を、解釈者が作者の理解を完遂することだと我々が言い代えれば、それはやはり言い過ぎになるだろう。意味と意義の関係を取り扱う解釈学を歴史叙述の一つの模範とするディルタイが歴史理解の完遂を歴史叙述の最終目的だと考えたとは想像しがたい。

オロギーによって評価する視点を持たぬよう努める限り、故人への評価は変化し続けるのではないか。先のディルタイの説明に反して結局のところ、死の間際であろうと他者からの追体験であろうと、意義と意味の探求はやはり決して完遂しない過程であろう。

実際のところ、ディルタイにとっての関心は人生の終わりに人生の意味と意義が確定されるかどうかというよりも人生の意義と意味の理解過程が完結しない人生の中でこそ遂行されるということにあったとみたほうが適切である。同じ論考の別の個所で人生の意義を理解するための人生の最後の働きについて反実仮想的に触れている個所はこのことを示している。「人は人生の最後を待たねばならず、死の間際になってはじめて全体を見渡すことができるだろう。人は歴史の意義のために完全な資料を確保するためには歴史の最期を待たねばならないだろう。しかしながら、全体というのは、全体が部分から理解される限り、確かに我々にとって存在するのだ。理解はこの両者の考察の仕方の間で揺れ動く(schweben)のだ」(VII, 233)。結局、全体は部分から示される相関項であり、部分が存在する限りでのみ存在する。全体を待つて部分の意義が確定できるかどうかという反事仮想が実際の探求にとって余地はない。個人の体験とその個人の人生全体、そして、諸個人と歴史歴社会的世界、このそれぞれにおける意義と意味は生とともに動き続けており、我々は動くものを動きながら掴まねばならないのである。

しかし、全体が確定されぬがゆえに続くこの徒労ともいえる意味と意義への探求を我々それでも続けるのはなぜか。いったい、生がその変化する最中において生が語られるということはどのようなことなのか。

4. 歴史が開かれて人は学ぶ

全体が閉じないということ、それにもかかわらず、全体が部分から把握されうること、そして全体の緩やかな理解が部分の理解を進めること、以上のことが意義と意味の可能性を成立させている。ディルタイはこの関係を単語からそれが属する文章が理解される関係として幾度も触れつつ、「意味の未規定性(Unbestimmtheit)によって意味の可能性と個々の単語」が規定されると述べている(VII,235. Vgl.VII,233f.)。しかし、ディルタイにとって意味の未規定性は単語に対する文章の持つ性格である以上に歴史のイデオロギーに対する批判にとって決定的に重要であった。

「意味と言う語は、そのもとで歴史的過程が理解されうる前提をいみするに過ぎないのであって、作用様式それ自体から区別された力、この過程の諸部分に対してあたかもこの過程の内在的本質存在が意義を分け与えるような力を主張しているわけではないのである。

意味と言う語は歴史が理解されうる条件があるにすぎないのであって、歴史の産物や成果は普遍史なのである。意味は歴史哲学の中で予見とか内在的目的とか歴史的形成力として発展させられえような歴史に内在するものか歴史の実在的条件として歴史の中にある何らかの統一的な原動力のようなものの更なる前提ではないのである。」(VII,287)。

このようにディルタイは歴史の全体をある種の定式によって規定したうえで進歩として捉える歴史哲学への批判を念頭にして、意味をそれ自体で確定的に規定することの過ちについて強い注意を我々に喚起する。意義についての説明の際にディルタイが用いた表現をここに引けば、意味もまた未規定的な仕方規定(unbetimmt-bestimmt)されねばならないのである。

ところで翻ってみれば、この歴史哲学批判はディルタイが『精神科学序説』(1883)以前から一貫して抱いてきた危機感から来るものであった。歴史哲学が一般的表象や形式によって歴史全体を一元化しようとした失敗を克服するためには、「歴史の意義が計り知れない多様な価値から成る」(I,97)ことを理解せねばならず、「情意生活(Gemütsleben)の中で価値や規則の根源及び存在や現実に対するその関係を探求する自己省察と、纏れ合う歴史の全体のこの側面を分解する、漸次的でゆっくりとした分析」(I,98)が求められねばならない。「というのも、人間にとって価値あるものが何か、どのような規則が社会の行為を指導すべきか、このことは普遍妥当な理解を得る見込みのある歴史探求の助けを借りてのみ研究されることができるからである」(Ibid.)。歴史全体に対して歴史哲学がもたらしたような形而上学的定式を強要することなく、さらに歴史過程を単なる相対的事象の併存と考えることなしに、現在の我々自身につながる普遍史として紐解くことで人間にとって価値あるものやなすべき行為が示される。ディルタイの見るところ、これこそが歴史の役割であった。ニーチェにとって歴史の過剰とその克服としての歴史の放棄が行為的人間を生み出すことに向かわせるのだとすれば、ディルタイにとって歴史に学ぶことこそが人間に行動指

針を与え行為的人間を生み出す。それはあくまでも歴史全体の意味によってではなくその都度の歴史の分析を通してなされるべきものだったのである。デールタイは生の意味の規定を確定しないことでむしろ生の意義と意味の解釈を突き進ませるのである。デールタイの「続編草稿」の末尾の文章はこのことをはっきりと示している。

「どんな人間も生と世界の意義を探し求める。かつて人間は世界から生を把握しようとした。いまや生の解釈(Deutung)から世界への道しかない。生はただ体験、理解、歴史的把握のもとにしかない。我々は世界についてのいかなる意味も生に持ち込まない。意味と意義が人間とその歴史において成立する可能性へと我々は開かれている。意味と意義は人間とその歴史の下で初めて成立する。個々の人間のもとではなく歴史的人間のもとで成立するのである。というのも人間は歴史的存在だからである。」
(VII,291)

5. おわりに

体験と人生そして個人と歴史社会を語るとは、生から抽出された意義と意味というカテゴリーを用いて、ただし、それらを未規定的に規定するということであつた。すなわち、体験、人生、個人、歴史社会というこの生を把握するためには、我々は常に意義と意味の間で揺れ動かねばならない。本論のこうした見方は分析哲学の流れを汲む哲学者たちが行ってきた人生の意味論（生きる意味論）よりも広い視野と足場を持っている。いくつか挙げてみよう。或る人が自らの生きる意味を措定した際、その意味を取り囲むコンテクストを見渡すことでその生きる意味は不条理になってしまうという議論（Nagel(2013)）、その不条理を止めようとするためにそれ以上超えられない限界を想像すべきという議論（Nozick(2013)）あるいはメタナラティブからみた終わりを重要視する議論（Sechris(2013)）、さらに、人生の意味は客観的ないみで確証されなければならないという議論（Kekes(2000)）、何かのためではなくそれ自身のために行われる行為が人生に意味を与えるという議論（Schlick(2008)）という風にして哲学者による人生の意味論は広がっている。本論は最後にそうした人生の意味論に対してデールタイの意味論を位置付けて評価しよう。

まず、生のカテゴリーとしての意味カテゴリーは生を把握するために用いられるカテゴリーであり、そのカテゴリーの内実を一義的に規定できないものであることを本論は確認した。それゆえ一方で、人生の目的や善さ等を定めるものとして人生の意味を論じる上述の諸理論は生のカテゴリーとしての意味カテゴリーの特徴を自ら示しているといえよう。というのも、上述の生の意味論が成立しうるのは意味カテゴリー自体の規定が曖昧であり続けるからなのである。それと同じ理由で、上述の諸理論が念頭にしていた生きる意味ないし生きがい以外のいみで我々は人生の意味を語ることもできる。それは例えばルターの彼の時代における宗教者として役割や代表性として語られるようないみでのルターの生きた意味である(VII,237. Vgl.VI,314)。このように様々な人生の意味論が可能であるのは、ディルタイの議論に即せば、生のカテゴリーとしての意味カテゴリー自体が一義的に規定されないがゆえになのであった。

より重要であるのは、ディルタイの議論は上記の人生の意味論と大きく異なる視点を我々に与えている点である。ディルタイによれば意味カテゴリーは意義カテゴリーと相関的であることで生の全体と部分を示すことができる。それ故、ルターの人生の意味は彼の生きた時代との間での部分と全体の関係によって両者を循環的に関わらせることで示されたのであり、そしてさらには彼の人生の意味は現在の我々に連なる普遍史という全体の中で新たに語り直される。生の意義と意味はあくまでもその都度の全体において語られ、歴史社会の中で我々が生を営む限り、語り直され続けるのである。このことは当然、我々が一度は規定した生の意味はその後に訂正されたり無効となったりする可能性が常にあるということでもある。たとえば重大な事故や病気や迫害などの体験によって傷ついた人にとって、傷つけられる以前までの人生のなかでその人が培ってきた人生全体の意味は今や根本的に滑り落ちていくかもしれない。しかし、そうした不条理に傷つけられた人生は、肯定的な意義をもった新たな体験によって再びしかし別様な意味をもって回復できるかもしれない。上述の人生の意味論はこうした人生の意味の語り直しを主観的相対的な意味論と呼んで単純化し客観的な意味論と対決させることに関心を向け、人生のその都度にとっての人生の全体の意味という視点に気づかない。それに対してディルタイの議論は、人生の意味を超越的究極的に捉えるイデオロギーに決して与せず、そうかといって単なる刹那的な主観的現象として人生の意味を取り扱うわけでもない。彼の議論は人生の意味をその都度の体験から出発して人生及び歴史社会という全体のなかで具体的に探る人間の営為を認

識論と具体的歴史叙述を通して説得的に示していると本論は評価したい¹¹。生の意味と意義は、人が世界をよく知りよく生き抜くために、生が続く限り常に書き直されねばならないのである。

自らも癌を患いながら、癌患者たちの自己物語を分析するフランクの一文を最後に引用したい。「生は絶えず移ろい、その動きとともに物語りは変化し、そして経験も変化する。物語は、流れゆく経験に対して真実であり、物語りはその流れの向きに影響を与える」¹²。

文献リスト

Bollnow, O. Fr. (1980): *Dilthey. Eine Einführung in seine Philosophie*, 4. Aufl.

Schaffhausen 1980. (翻訳:麻生建訳、『デイルタイ その哲学への案内』、未来社、1997年.)

Dilthey, Wilhelm: *Dilthey Gesammelte Schriften* (vol.I-XXVI).

Frank, Arthur W.(1995): *The Wounded Storyteller: Body, Illness, and Ethics*, Chicago.

(翻訳:鈴木智之訳『傷ついた物語の語り手—身体・病い・倫理』、ゆみる出版、2010年.)

Frankl, Viktor E. (2010): *The Feeling of Meaninglessness: A Challenge to*

Psychotherapy and Philosophy, Milwaukee. (翻訳:『虚無感について 心理学と哲学への挑戦』、青土社、2015年.)

Husserl, E. : *Logische Untersuchungen, Zweiter Band, Erster Teil: Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis*, in: *Husserliana (XIX/1)*, hrsg. von Ursula Panzer, Martinus Nijhoff, The Hague / Boston / Lancaster, 1984.

Kekes, John (2000): *The meaning of life*, in: *Midwest Studies in Philosophy* 24 (1), pp.17–34.

Makkreel, R.A. (1987) : *Dilthey - Philosopher of the Human Studies*, Princeton. (翻訳:大野篤一郎ほか訳『デイルタイ—精神科学の哲学者』、法政大学出版局、1993年.)

Metz, Thaddeus (2013): *Meaning in Life*, Oxford.

¹¹ 以上の点からみて、意味とは何かという問いに対して客観的な答えは与えられず、意味とは物語りという営為に属す実践概念だとみなす山口の指摘は十分理解できる (山口(2012)、45 ページ.)。

¹² Frank, Arthur W. (2010)、翻訳 43 ページ。

- Nagel, Thomas (2013): The Absurd, in: Metz, Thaddeus (2013): *Meaning in Life*, Oxford, pp.236-244.
- Nozick, Robert (2013): The Concept of a Meaning of Life, in: Metz, Thaddeus (2013): *Meaning in Life*, Oxford, pp.62-78.
- Owensby, Jacob(1994): *Dilthey and the Narrative of History*, Ithaca and London.
- 佐藤 透 (2012): 「人生の意味の哲学—時と意味の探求」、春秋社.
- Schlick, Moritz (2008): On the Meaning of Life, in: *The Meaning of Life*, edit. By E. D. Klemke and Steven M. Cahn, pp.62-71
- Seachris, Joshua (2013): Death, Futility, and the Proleptic Power of Narrative Ending, in: Metz, Thaddeus (2013): *Meaning in Life*, Oxford, pp.461-480.
- 上島 洋一郎 (2011): 「感情の志向性とその表現について ディルタイとフッサールを比較して」、『フッサール研究』9号(57-70 ページ).
- 上島 洋一郎 (2012): 「ディルタイの精神科学の基礎付けと価値論」『現象学年報』第28号(149-156 ページ).
- 山口 尚 (2018): 「歴史における人生の意味の照応 日本近現代史と物語論」、『現代生命哲学研究』第7号(36-73 ページ).